



環境の世紀

いすゞ自動車(株) 特別理事
東日本旅客鉄道(株) 取締役

稲生 武

従来、頭や理屈で理解していた地球環境問題をいよいよ肌で感じるようになってしまいました。世界各地で起こる洪水、集中豪雨、火山の活性化や年々増え続ける黄砂、河川の枯渇などなど、不安な自然現象が身の回りで頻発したり、新聞やテレビで頻繁に報道されるようになりました。

地球温暖化、オゾン層の破壊、砂漠化、化学物質の蓄積、水質の汚染など、いずれについてもその実態が現在どのようになっているかを調べてみると、残念ながら、このかけがえのない地球を健全な姿で子供や孫に渡してあげることがひどく難しいことのように思えてきます。

そして、まさに21世紀初頭の私達人類の最重要課題が地球環境問題なのだ実感させられます。

この問題になかなか本気で取り組む気持ちにならない理由について多くの人達が次のような指摘をしています。

- ・公害問題のように、被害者と加害者に割りきれない。
- ・長い因果関係の連鎖で最終的に、何が、何時、何処で起こるか誰にも説明できない。そして、いったん起こると制御不能になってしまう。

このことに同意した上で、私はもうひとつの大きな理由として、経済合理性を付け加えたいと思います。すなわち、環境に配慮した企業活動はコストが余計にかかり、競争力が低下するとする考え方で、アメリカのブッシュ政権が京都議定書から離脱した主たる理由であり、企業業績と環境問題は両立しないという基本的な考え方に基づいています。

前々からこの環境分野においても、いずれを優先するかというプライオリティー思考、いわゆる二者択一の考え方ではなく、本質に迫ることによ

って、価値の極大化をはかり、機能とコストを両立させようとするVE思考を入れることができないだろうかと考えていました。

幸いにして、ここに来て、いろいろな業界の多くの企業において、企業経営と環境問題を両立させようとする気運が急速に高まってきました。

地球環境問題が既に待ったなしという深刻な状況にあるという危機感と、この問題に真剣に取り組む姿勢が企業存続の必須条件という認識を持ったからです。

私が永年お世話になっている自動車業界の例を紹介します。

文字通り、自動車の心臓であり、約110年、熟成を重ねてきたエンジンですら、内燃機関から燃料電池へシフトしようとしております。ゼロエミッションは当然のこととして、化石燃料ではない完全な循環型エネルギーで動く自動車に大変革しようとしているのです。

目標は非常に高く、機能で数倍から数十倍、コストはざっと1/100にしないでなりません。従来の考え方、手法ではまず不可能でしょう。

まさにVE、 $V = F / C$ の出番だと思えるのです。新しい原理、新しい材料、新しい構造、新しいシステムが随所にあります。それゆえにこそ、VEが存分に力を発揮することができると思うのです。そしてこのような状況は自動車業界だけでなく、ほとんどの業界が同じような状況にあると思います。

未来の子供のために環境の分野においてもこの優れたVE思考、VE手法が存分の貢献をしてくれることを願っております。そして、微力ながら私も全力を尽くしたいと思っております。

(筆者は本会理事)